

．．． 裏

ナレーター この時から、村の病気の人達はあっという間に元気になって、そしてまたみんなが幸せに暮らせるようになりました。

道昭さまは、朝廷から広い土地をいただき天神さまを祀るお宮を造って村の氏神としました。

それから、この村は瓜破と呼ばれるようになったということです。

このおはなしは、瓜破の村の歴史を書いた船戸録という古い本をみてつくつた紙芝居です。

おしまい。

紙・・・裏

ナレーター みなさん、こんにちは。

さあ、この字はなんと読むかわかりますか。

そう、うりわりと読むのですね。

平野区には瓜破という町がありますが、どうして、そういう名前がついたのでしょうか。

それは、この紙芝居をみてのお楽しみです。

．．． 裏

ナレーター これは、千年以上前の、瓜破辺りの地図です。

その頃、今の太和川はなく、東除川と西除川という川が流れていました。

そのふたつの川に挟まれるようにして瓜破がありました。

そこは、お米や野菜がたくさんとれるたいへんよいところだったそうです。

．．． 裏

ナレーター の瓜破の人々は、屋根が草でできている草葦の家に住んでいました。

そして毎日、田んぼや畑で一生懸命働いていました。

でもあるとき、大変なことが起こりました。

とても悪い病気がはやって村の人々は次から次へ、バタバタと倒れていったのです。

．．． 裏

ナレーター そんなある日、この村を道昭という、とてもえらいお坊さまが通りかかりました。

道昭 「はて、そろそろ田植えの頃であろうにどこも田植えをしておらん。

この村は働き者が多く米や野菜が多くとれると評判の村であるのに…。」

ナレーター 不思議に思っていると一人の娘がやってきて手を合わせていいました。

娘 「お坊さま、この村は今、悪い病気のために大変苦しんでいます。どうか、村のみんなをお救いください。」

道昭 「それは、お困りでしょう。私も今日まで懸命に修行をしてきました。村の皆さんのためにお祈りいたしましょう。」

．．． 裏

村人 男 「えらいお坊さまが村の為に祈りをしてくださるそうじゃ。」

村人 女 「さあ、元気な者は誰でもお堂造りのお手伝いをやらせてもらいましょう。」

子ども 「おいら、病気のおとうちゃんの代わりに手伝いする。」

ナレーター 道昭さまに、祈りをしてもらうためのお堂を造ろうと、おじいさんも、おばあさんも、子どもも村の元気な人々はみんなで力を合わせました。

そして、大きなえのきの木の下に小さなお堂ができあがりました。

．．． 裏

道昭 「村の人達がみんな元気になりますようにムニャムニャムニャ・…」

ナレーター お堂に入った道昭さまは毎日、毎日、一生懸命お経をとなえました。

何も飲まず、何も食べないのでどんどんやせていきました。

娘 「このままでは、道昭さまが病気になってしまいます。どうかこの瓜を召し上がってください。」

ナレーター そんな道昭さまを心配した娘さんは瓜をふたつに割ってもってきました。

．．． 裏

ナレーター この年は村のほとんどの人が病気になったのでお米を作るための田植えが全くできませんでした

しかし、不思議と瓜だけは順調に大きくなっていました。

ですから、お堂には毎日、瓜がお供えされました。

．．． 裏

ナレーター 道昭さまがお祈りを始めてから二十一日目のことです。

ピカッ！突然、お堂の庭のえのきの大木に光が走りました。

道昭 「一体どうしたのだろう。」

ナレーター 不思議に思った道昭さまが大木の根本に行ってみると、なんとそこに天神さまの像がおられました。

道昭 「おお、なんと立派な天神さまであろう。この天神さまはきっとこの村を救ってくださるに違いない。」

．．． 裏

ナレーター 次の日、道昭さまは大切に天神さまをお堂にお祀りしました。

そして、娘さんや村の人々を集め、ゆうべの出来事をみんなに話しました。

道昭 「この村は、この天神さまに救われるでしょう。私がお祈りをしている時この
こころやさしい娘さんは、私の身体を心配して瓜を食べさせてくれました。天神さ
まにも瓜をお供えいたしましょう。これからも、瓜はこの村の皆さんを救ってくれ
るでしょう。」

ナレーター そういって、道昭さまは瓜をふたつにポンと割ってお供えしました。